

いわみじょうあと
石見城跡 発掘調査現地説明会

令和6年1月23日(土・祝)
京都市文化市民局
文化芸術都市推進室 文化財保護課

1. 石見城跡について

石見城跡は、京都市西京区大原野石見町に広がる遺跡(周知の埋蔵文化財包蔵地)です。善峰川の右岸にあたるこの地域では、弥生時代(2世紀頃)から人々が集落(ムラ)を作り、暮らしてきました。また古墳時代中期(5世紀頃)には、前方後円墳を築く力をもった首長が治める土地であったことがわかっています。

室町時代(14世紀後半~16世紀)には、この地域は広く「西岡」と呼ばれ、複数の小領主が連帯して治めていました。彼らは室町幕府の側近と強く結びつくことにより勢力を強めていったと見

られています。小領主たちはそれぞれが治める地域に城や館を築きました。石見城(館)もそのうちのひとつと考えられています(図2)。

応仁元年(1467)、京を揺るがす大戦争である応仁(・文明)の乱が始まると、西岡の領主たちは細川勝元が率いる東軍に属して戦いました。しかし、その中から西軍へ味方する武将が現れたため、一帯は激しい戦火にまつまれました。

文献史料によると、石見城(館)は文明2年(1470)に寺戸城主であった野田泰忠の攻撃を受け、善峰川対岸の上里館や、南の井内館と共に焼失しました。以後、石見城の情報は途絶えてしまい、その実態は謎に包まれたままとりました。



図1 調査位置と周辺の遺跡



図2 西京区及び周辺市町の主な城跡

2. 調査成果

2004年度、都市計画道路中山石見線の建設に伴って発掘調査が行われ、鎌倉時代~室町時代(12~16世紀)の建物跡が多数発見されました。このうち室町時代前半(14~15世紀)の建物の主軸が、東側の段丘崖上にある高まりや窪みの方向と揃うことから、これらが石見城の土塁や堀である可能性が示されました。

2021年度、京都市は石見城の構造を明らかにするため、5カ年にわたる範囲確認調査を計画しました。2021年度の調査では、対象範囲の北東部において14~15世紀に埋没した堀を2条検出しました。また、2022年度の調査では、城跡を取り巻くように残る土塁と堀跡が14世紀頃に構築された施設であることを確認しました(図3)。さらに、城の東側でも土を削って盛土を行った跡を見つけました。これらから、この場所に室町時代の城跡が存在したことが、ほぼ確実となりました。

続く2023年度の調査では、土塁の外側(旧善峰川の河原)において、人頭大の石を並べた石塁(13世紀に埋没)を発見しました。防御や河川に関連する施設の一部と考えられます。また遺跡の西半部では、13~15世紀の柱列や溝跡を複数確認し、2004年度に報告された居住域がさらに東へ広がることを把握しました。

2024年度(今年度)は、土塁に囲まれた城館の中心部(郭)と考えられる範囲を調査しています。これまでに14~15世紀の土坑や溝、柱穴を多数検出しました。遺構面は2面検出しましたが、遺構の重なりから、少なくとも3時期の変遷が想定できます。このうち、もっとも大きく変化したのは14世紀末~15世紀前半頃で、土塁をより高く盛り上げ、堀を作り変えて土塁や郭を拡張するなど、防御機能を高める改造がなされました。

石見城・西岡衆 関連年表

- 1336 (建武3) 西岡衆、足利尊氏軍に味方する。やがて室町幕府の被官衆となる。
- 1467 (応仁元) 応仁・文明の乱勃発。東軍に所属。
- 1469 (応仁3) 西軍、西岡を制圧。西軍に所属。
- 1470 (文明2) 東軍の野田泰忠、上里・石見・井内館を焼く。『野田泰忠軍忠状』
- 1477 (文明9) 応仁・文明の乱、終息。
- 1481 (文明13) 久我荘の一部を石見小野氏が押領。『久我家文書』
- 1485 (文明17) 西岡土一揆が東寺に乱入。山城国一揆が起こる。『東寺百合文書』
- 1487 (長享元) 西岡衆連署状に「小野太郎左衛門尉仲重」が署名。『東寺百合文書』
- 1553 (天文22) 三好長慶、畿内を制圧。
- 1568 (永禄11) 織田信長、入京。西岡所々を焼く。
- 1573 (天正元) 西岡灰方の下司「小野次郎左衛門」の記述。『遠山家文書』



図3 2022-2調査区 中心部をめぐる北側の堀と土塁



図4 2023-2調査区 石積遺構の検出状況



中山石見線道路予定地

石塁

居住域

居住域

土塁

土塁

拡張部
(横矢?)

集石

土塁

石列

集石

土坑

溝

溝

区画

土

焼土

堀

土塁

堀

Y=-29,100

